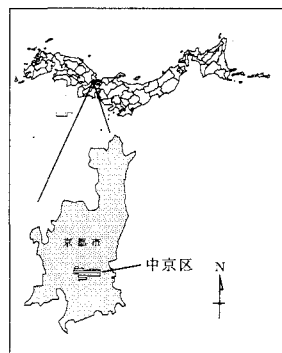


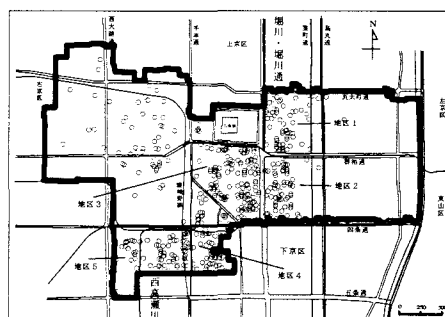
大阪工業大学工学部	学生員	○齊藤 友宏
大阪工業大学工学部	正会員	岩崎 義一
大阪工業大学研究生	正会員	南田 幸保

1. はじめに：京都市中京区では京友禅をはじめ、多くの染め物産業が歴史的に集積を形成してきた。しかし、和服需要の減少などにより多数の工場が移転や廃業を余儀なくされている。現在の染め物産業を産業や技術だけでなく文化的資産として将来に継承していくことは、今後の京都市の持続的発展のためにも必要なことであり、そのためには産業及び都市の構造変化に照らして染め物産業の変化像を明らかにすることが重要である。とくに世界にも知られた京町屋が生産現場となっていることを勘案すると、建築的な視点も疎かにはできない。本研究は、この変化像を明らかにすることを目的に、約25年間の期間における染物工場の集積パターンの変化と染物工場による京町屋の利用意識について実態を明らかにした。方法は、京都市中京区(図表1)を対象に、現地視察と住宅地図により染物工場を特定するとともに、ヒアリング及びアンケート(2003.10.30~2003.11.28、回収件数134件)により実態調査を行った。



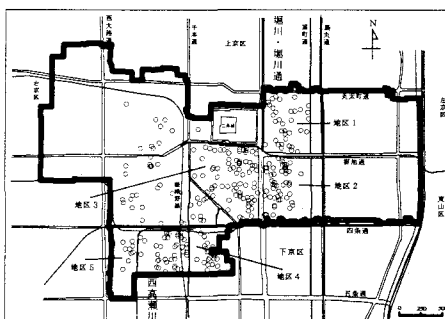
図表1 対象地区図

2. 中京区における染物工場の分布実態：現在の染物工場数は279件(2002年)であり、約25年前の466件(1977年)から約200件の減少となっている。この間、工場密集地区以外では中堅以上の工場の移転や廃業が多くみられ、密集地区では小工場が減少傾向にありながらも現在でも集積を維持している。工場集積は堀川・堀川通りと西高瀬川沿いの地区に見られる。(図表2-1・2-2)



図表2-1 1977年の染物工場立地

3. 染物工場の集積タイプ：工場の消失に伴う分布変化を評価する。方法は、統計的手法①)によった。この結果を示したのが図3-1,2である。これによると、堀川を挟む地区2、3、4は強い集中から弱い集中又は分散に変化し、残る地区1、5は工場の消失に伴う残存工場のコロニー形成傾向により集中傾向か強い集中傾向となっている。

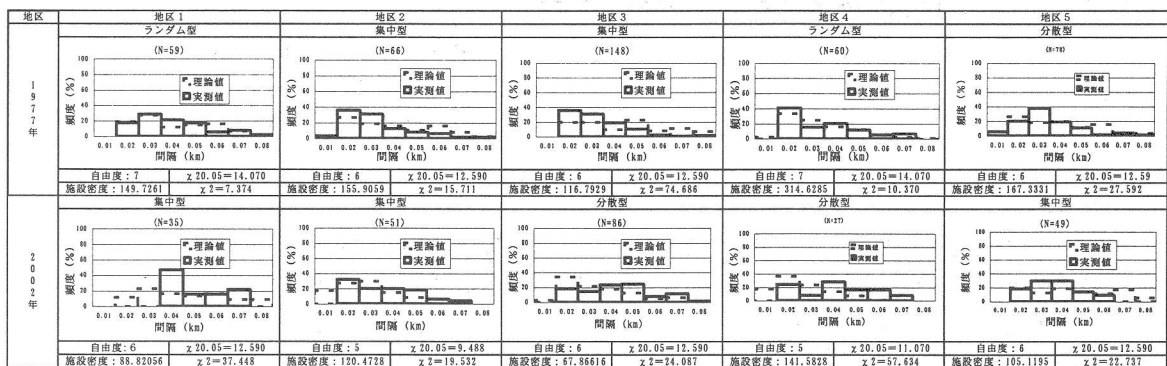


図表2-2 2002年の染物工場立地

4. 工場移転跡地の利用：次に跡地をみると、住宅としての利用が殆どとなっている。ビルなど他の産業系用地としての利用は極めて少ない。この傾向は地区別に見ても同様であった。(図表4)

5. 生産現場としての京町屋の立地環境評価：染物工場を町屋造りと非町屋造りの二つに分けて、立地環境評価により町屋造りの重要性意識を外的基準にして分析を行ってみると、町屋造りの方が作業に適しているという考えが強く出ており、また、周辺環境についても同業者ネットワークを中心に生産現場としての立地評価は高いようである。(図表5・6)

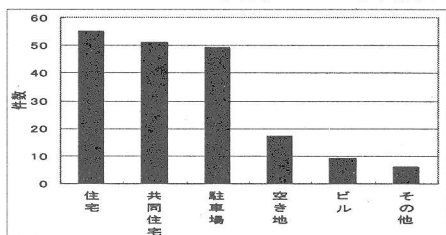
6. まとめ：本研究で得られた結果として、染物工場数はかなり減少している中で、河川(歴史的に染め工程の関係から清流は重要な立地因子であった)近辺では今もお工場の集積は高い。町屋建築は、構造上係る産業の生産工程において重要な役割をもっており、これらの集積地区では同業者ネットワークなど優位な立地条件も形成されている。これらの総括として図表7に記した。紙面の関係上詳細は割愛し、発表時に説明する予定である。



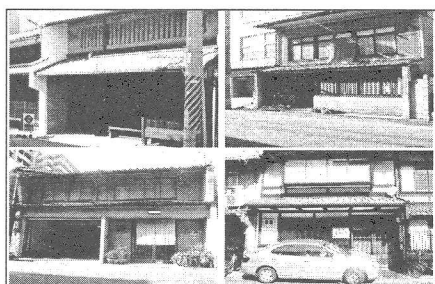
図表 3-1 年代別・地区別ランク度数分布

	地区1	地区2	地区3	地区4	地区5	凡 例
1977年	△	◎	◎	△	×	◎ 強い集中型 △ ランダム型
2002年	○	○	×	×	◎	○ 弱い集中型 × 分散型

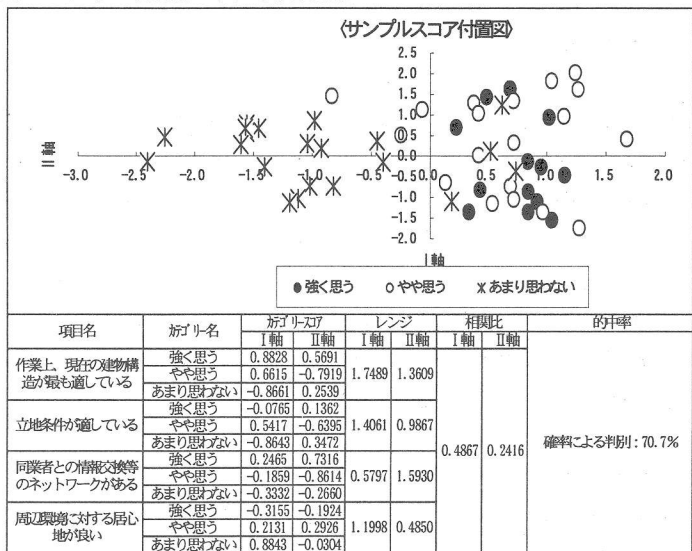
図表 3-2 年代及び地区における集積タイプ判定結果



図表 4 工場跡地利用図



図表 5 町屋造りの染物工場



図表 6 数量化Ⅱ類分析による生産現場としての京町屋の評価

該当する地区	集積変化のパターン	跡地利用	アンケート
地区1: 問屋街の室町通りと堀川に挟まれている地区である。	ランダム→集中	地区が住宅地であり、工場の規模も大きくない跡地としての利用も全体的に小規模である。	町屋造りの工場が最も多く、創業から現在まで同じ場所で継続して創業している工場が多い。また、立地条件やネットワーク・居心地に関しても他の地区より良いと考えている。
地区2: 問屋街の室町通りと堀川に挟まれている地区であり、工場の減少数が最も少ない地区である。	強い集中→集中	地区1と同様の環境である跡地としての利用としては同じであるが、駐車場としての利用は少ない。	地区1と同じであるが、違う点として明治前から創業している工場が数件あるということである。
地区3: 三条城南に位置する地区であり、地区の中央部を南北に寺社が並ぶように存在している。また、地区の東側は堀川沿いであり工場数は多いが、西側には旧国鉄の敷地があり、工場数は少なくなっている。	強い集中→分散	中規模な工場が一番多い地区であり、敷地の広さを活かして住宅を数件建てたりしている。	建て替えや移転を望んでいる工場が最も少なく、建物構造が作業工程や関係作業に適していると考えている。
地区4: 京友禅発祥の地である壬生を中心とした地区である。	ランダム→分散	共同住宅の数が少なく見えるが、いずれも大規模なものであり駐車場も大規模である。	創業し始めたのが他の地区より遅く、殆どの工場が町屋造りではない。建物構造が作業に適していると考えている工場が少ない。
地区5: 敷地面積的に大規模な工場が一番多い地区である。また、壬生でもないので比較的工場数が多い。	分散→強い集中	地区の外周は大規模な工場が多いが、共同住宅としての利用が多い。逆に地区の中央部は住宅が密集しているため、住宅として利用されている。	他の地区と比較すると立地条件が良いと考えている工場が極端に少ない。しかし、現在まで同じ場所で創業を継続している工場が最も多い地区である。明治前から創業している工場が最も多い。

図表 7 総括表

(1)最短距離の実測値をランダム分布の理論モデル(ここでは、乱数による80個のデータを20cm×20cmのスペースに付置し、これをランダム分布の理論値としたものである)で変換することにより適合度検定で判定した。